



河合文化教育研究所
主任研究員 丹羽健夫

『定本 日本の秘境』

岡田 喜秋著
ヤマケイ文庫 950円+税



著者は雑誌『旅』の元編集長である。本書は「山、谷、湯、岬、海、湖」という六つの環境から、著者の歩いたそれぞれ三カ所を選んで語られたものである^(注)。

「湯」の中の『**中宮温泉の二夜**』は、白山下という北陸鉄道の終着駅から、深い谷を四里ほど分け入った中宮温泉での話である。ここには宿は四軒あるが夜はランプしかない。著者はここの宿でさまざまな「山^{ばなし}」を聞く。

夏の夜、ハチムジナが「こんばんは」と戸をたたく。冬は丈余の雪に埋もれるから、人は屋根をはずして山をおりる。屋根をはずさないと家は潰れてしまうからだ。

『^す酸ヶ湯の三十年』

酸ヶ湯は八甲田山の南麓の温泉である。八甲田山は陸軍歩兵隊の雪中

行軍中の大遭難事件として有名である。

酸ヶ湯には、北海道・青森・岩手・秋田などの農民がやってくる。神経痛を治したい人が多いが、小児麻痺の人が一カ月で快癒したなど、宿の主人が驚くこともあるような。

青森と酸ヶ湯の間は雪上車で連絡していた。ある年の正月、雪上車でやってきた素人のスキーヤーが、山に入って消えた。山に対してたかをくくっていたのだろう。この事件で酸ヶ湯の主人の白戸さんは、宿の収入を犠牲にして雪上車をやめた。

『夏油という湯治場へ』

夏油と書いて、げとう、と読む。著者はいまだにランプがあるらしい

という期待を抱いて、東北本線の北上という駅で降りた。バスで一時間、その先をさらに徒歩で一時間、古びた農家のような湯治場は満員であった。客は男女とも等しく老いて、日本の農民たちであった。湯治場は彼らにとって、病院あるいは人間ドックとっていいだろう。

「宿泊料二食付六百円」と書かれた棟はひとつしかなく、他の六棟は自炊客が寝起きしている。夜になると湯治客は一部屋に集まって、枯れた喉をふりしぼって、土地の民謡を歌った。

山を愛し旅を続けた筆者と、行を共にさせていただける好著である。

(注) 本書の内容は主に昭和30年代前半の旅の記録です。現在の一般的な環境や意識とは異なる内容も含まれますが、当時の状況を考慮してそのままにしています。

